ヒカリ

YUIKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒカリ

【Ｎコード】
Ｎ３０６１Ｂ

【作者名】
ＹＵＩＫＡ

【あらすじ】
ごくごく普通の中学生ユメは中学生でよく起きそうなトラブルなどに見まわれる。でも中学生だもん。スカート上げたりルーズ履いたり恋したり。いろんなこと経験していきながら強くなって行くんだ。みんなと一緒に。嫌だった先公の事もいろんな角度から見れば意外に努力してた事に気がつく。大好きな大好きなみんなと一緒に卒業したい…そう思ってた。普通にこの前までは…大好きだけどみんなとの思いでは、忘れる事になっちゃう…ユメは幸せだよ。こんなに温かい人達に囲まれてさあ。大好きだよ…でも…この先の言葉

に込められた一つの思いとは？中学生の感動の実話、今ここで明かされる！

～そして希望へ～（前書き）

目を閉じて、１０秒間数えてください。そしてゆっくり目を開けてください。目を開けられる事、自分は生きていると言う証拠です。周りを見渡してください。ちょっと不良な友達もいれば、優等生の子だっている。いろんな人がこの場所にいる。温かい仲間がいる。自分らのこと見てくれない親や先公たちもいる。そんな中で私達は生きてる。こんな息苦しい。小さな世界で私達は生きている。たばこ吸ったりする。かっこつけたいから？そんなんじゃない。なんかスッキリするんだ。勉強に付いて行けない。ばかじゃねえの？できないから何なんだよ？そんな事よりも、今を一生懸命生きたほうが私は強い生き方だと思う。だからもしこの話を読んでくれているあなた。誰だってこうなる事は望んでいないの。でも、こうなるんだよ？だからこういう事が起きても逃げたらいけない。迷ってはいけないの。自分の道を、光が差すほうへ、歩いて行かなければならない。たとえ歩く道が違っても、ゴールはみんなおんなじ場所だから。最後に気づく事って多いよ。あなたは幸せだったのかな？うん！ぜったいしあわせだったよ。と胸はって言える日が来るに違いないもん。勇気を持って、この話を読んでください。

～そして希望へ～

もしキミは幸せですか？と聞かれても、私にはピンとこないんじゃないかな…。

もしあなたは幸せでしたか？と聞かれたら、あなたはきっといいえと応えるでしょう。

何が起こるか分からない世の中で、今僕等はこの時を生きています。

ユメは、この1年間だけでも息が詰まりそうだった。

それでもこの少女は、いや、このクラスの一人一人は、強かった―。

心の準備は出来ましたか？何があっても今この本を読んでいるあなただけは、

目を閉じないで…

●入学式

２００６年４月１０日。心地良い風と共に舞い落ちるサクラの木の下で私達は入学した。

中学一年生…なんか緊張するなぁ…

期待で胸をふくらませているのはユメだった。元気が良くて人

一倍意地っ張りでわがままな少　　女は何やら落ち着かずに一人でそわそわしていた。
「ユメ、何そんなにそわそわしちょるん？落ち着けぃ。」
あまりの落ち着きのなさにあきれた口調で説教してくるのは小学校から仲の良い友達のマキだっ　　た。
「だってぇ、クラスが気になるやんかぁ。もう無理やっ！マキと離れませんよぉにぃっ！！」
「アホッ！離れても友達やて。どうせ部活も一緒やし。」
部活は小学校の時からやってるバスケット。マキもおるし、この部活に入る事のした。
ようやく校長の長い話も終わり、クラス発表に移った。１年１組…あった！！
「マキッ。おんなじクラスやでっ！！」
興奮して喜ぶユメと一緒にマキも手を合わせて喜んだ。
「ほな、これからまたよろしくなぁ！」
にっこり笑って微笑むマキの笑顔は、ユメのとびっきりの宝や。大好きやでぇ。
「ほな、教室行こかぁ。」
「うん。」
１学期の始まり…。嫌なメンバーかと思ったら、そうでもなく、みんな個性豊かな奴等ばかりだ　　った。
ユメは、個性豊か過ぎるんちゃうやろかぁ？そう思いつつも、やっぱり意地張ってしまう自分　　がいつもどっかにおンねんなぁ…
そしてこの個性的クラス、バラバラのクラスがまとまる日は来るのだろうか…。思い返せば、ク　　ラスわけが悪かったのかもしれない。
「おはようございます。私はこれからこのクラスを担当することになった玉治です。この１年間　　が終わって良いクラスやったなあと思えるようなクラスにしたいです。」

みんなは玉冶という名前に興味を持っていた。
「玉冶？変な名前やなぁ。」
「何が1年間終わって良かったと言えるクラスだよ？バカバカしいなあ。」
まあクラスの組み合わせも悪ければ盛り上がりにも欠けているに間違いないのは確かだ。
「学級委員長を決めたいと思います。誰か立候補は？」
まずここひとつの問題が起きる。誰も立候補がいないのだ。しかも女子だけ。
「誰もしてくれへん？」
「ハイ…私で良ければ…」
そう手を上げたのはユメだった。
「ユメっ？ほんまにええん？マキがしようか？」
「うん。誰も手ぇ挙げへんからユメするよ！」
「ありがとう。ならよろしくね。」
まあもとわといえばこの頃から少しずつクラスが変わり始めていた。

●協力と自己中

8月5日。この日は一年と二年の先輩達と一緒に大分の九重山に登山に言った。
2泊3日も汚いテントの中で過ごすとなると、これはさすがにきついだろう。
食事もすべて班で作る。風呂は入れない。布団は固くて臭い毛布1枚。
こんな生活をどう楽しめというのか？九重に行くまでは誰もが同じことを考えていたに違いない。
「学級委員～！点呼しなさ～いっ！」
「何でユメがいっつも点呼やねん？」
いつもいつも学級委員を頼っていた玉冶にユメは怒っていた。
バスに乗る。

「おいおいっ！お前ら全員固まって座ろうぜ！」
「ええよぉ。騒ぎたいわぁ。何でかわからんけどさあ、きついのわかっとるんやけどなぁ、ドキ　ドキすんねん！！」
「それユメも思う！」
「ナオもぉ！」
「マキも！」
「カレンはどっちでもええわぁ。」
この頃1組は周りからは盛り上がりに欠けているだのまとまりがないだのと言いたい方だいいわ　れていた。まあまだマシなほうだったんだけどね。荒れてもないし。
バスの中ではみんなでガイガイワヤワヤしていた。楽しかった。逆にこの一時だけだった。
楽しいなんて言ってる場合じゃなくなるもん。
「こっ、ここで寝るんか？」
「マッ…マジで…？」
その光景はもう目を開けてはいられないほどの汚さ、空気の悪さだった。
「初めてや…こんなに汚い所に来たんは…。」
「帰りたいわ…」
がんばらなな！ここであきらめたら何もできへんままや。
「4時で～す。ご飯作ってくださ～い！落としたり、失敗したとしても、自分達で何とかしてく　ださ～い！」
「さすがに登山もしてここで寝泊りするには無理があるんちゃうかぁ？」
「ホラホラぁ！今ここでナオたちがあきらめたらどうするん？」
「そやな！ここまできたんや。なんとしてでも家に帰ろう！！」
そういってあきらめなかったのはクラスメイトのナオとカレンとソラだった。
マキとは今回班が離れてしまった。この3人とは一緒の班なの

に、何でマキとは違う班なんろ？
「とにかく作ろうか。」
「でたん旨いカレー作ったるでぇ！！」
「おうっっ！！」
みんな協力してやり始めた。一方他の班たちでは協力せずに自分かってな行動を取る奴らがいる　ようだ。
「協力せな自分が困るんやで？ほら、嫌でも自分のためやから。なっ？」
説得しているのは…同じクラスの佑だった。こいつは昔からやんちゃでハイテンションでクラス　の男子のなかで一番女ったらしと言われている存在。一方女子の中ではしゃべりやすくて良い友達だなって思っている人が多い。
「佑？どうしたん？」
聞いたのはユメだった。
「佐藤が…」
「協力せぇへんの？」
「しゃあないわ。こいつやる気なすぎや。」
佑があきれていた人物はクラスメイトの佐藤だった。こいつにはちょっとしたコンプレックスが　ある。実は小学生の時から体が太っていてそのくせ何もかもできないできないとわがままを言いながら生きている現実拒否人間だ。まあみんながあきれるのも無理はない。こいつのわがままさ　には困ったものだ。そしてこいつが、明日の登山でのトラブルを招く奴となる。明日だけではない。
これから先色々な面でこいつには振り回されてしまうなどと、この時は思ってもいなかった。

～そして希望へ～（後書き）

迷い

●登山

翌日、いよいよ登山する時がやってきた。風が気持ちい。最初はみんな明るい表情で歩いていた　がだんだん顔が引きつってきていた。

「これはきついでぇ？」

「佐藤が一番前やでぇ？遅いんだよなあ。さっさと歩けよぉ！」

歩くスピードの遅い佐藤にみんなはキレていた。

「ふうっ。やっと頂上かぁ！！気持ちいなぁ。」

「もうきついわぁ。佐藤の奴歩くの遅いんやあ！」

そう、問題と言うのは佐藤の歩くスピードの遅さ。まあしょうがないんだろうけど、どうにかし　てほしい。この時以来佐藤に対するみんなの目が変わる。ユメも一緒だった。

何とか無事帰りついた。もう後は家に帰って寝るだけや。はあ…疲れたわぁ…

●恋バナ

2学期に入る。さすがに寒くなってきたのでみんな冬服に衣替えしだした。

「寒くなったなあ。最近みんなときめいとらへんかぁ？？」

「ユメもやろぉ！！」

「えっ？ユメは全然そんな事ないよぉ。ソラのほうがときめいてんじゃん。」

この頃になると付き合い出すやつらが多くなる。ソラは昔から相手がおる。

とっても優しい人や。でもタメなんやなぁこれがまた。ユメ達の憧れはやっぱり先輩やなぁ…

「ユメぇっ！帰ろう。」

「そやな。今日塾やしなぁ。」

そう言えばもうすぐ体育祭の季節だ。
盛り上がる季節になりそうだ。
「なぁ！カレン～！」
「なぁ！！」
そういって顔を見合わせて何やらにやついているのはカレンとナオだった。
「なんやぁ？？二人して何にやついとるん？」
興奮気味の二人の顔をのぞき込むようにして質問したのはユメだ。
「せやからぁ！！」
「言うていい？カレン？」
「ええよぉ！！」
「カレンがなぁ、タメに恋してんねん！！」
タメとは同い年と言う意味だが、まさかカレンがタメに恋するとは思ってもいなかった。
「うっそ？ほんまにぃ！？だってカレン、タメが一番ありえないって言うてたやないか？」
「それがなぁ…もうだめやあ！かっこよすぎるんやぁ！！」
どう考えてもこのクラスにいい男なんかいない。
「それで、誰やねん？」
「ヒロト…」
「ほんまにぃっ？？」
「ほんまや…」
ヒロトはこのクラスの中でも運動神経が良くてクールな性格だった。
「まあカレンらしいわぁ。頑張りやぁ！！」
「わかっとるぅ！」
顔を赤らめて照れるカレンの顔は最高にかわいかった。
カレンは昔からよくモテていた。
だから絶対タメはありえないと思っていたが、まさかほんとに

タメをなぁ…意外すぎた。
　そしてタメを好きになったカレンのせいで、この先すごいトラブルが起きる事など、予想もしなかった。

一つに

●バラバラ

「よしっ！やるでぇ！」

一人で盛り上がっているのは玉治だった。

「何馬鹿な事言ってんだあの先公。佐藤がいるから勝てねえよっ！」

それもそうだ。佐藤は太っていて運動神経もない。まったくすべてが欠点でできているこいつに　何を言っても聞くわけがない。

「そんなの最初っからあきらめないの！先生はみんなが頑張ったら3位になれると思うよ？」

「ふんっ。こざかしいなあ！佐藤がおるんやで？3位なんか遠い夢やないか！」

佑は腹を立てて怒鳴った。その気持ちもわかるよ。玉治はまだ佐藤の欠点を知らないからそう言　う事が言えるんだろう。

体育祭まであと一週間となったこの日、クラスで朝練をする事になったが、クラスの大半は嫌が　っていた。それもそのはず。私達の学校では大縄と百足競争の種目があるのだが、まとまりがないので、大きな反乱が度々起こった。

「こんなことして、なんになるんやろ？」

そう口ずさむ人が増えたのもすべては佐藤のせいなのだ。

大縄をまわすのはなんと、佐藤だった。みんなのペースについて行けず縄がよれよれになる。

みんなはもちろん引っかかってしまう。みんなは佐藤にひどい暴言を吐いた。

「やる気あるんか？もう帰れよ！！邪魔なんだよ！わかんねえのか？」

「そんなん言うてもきついんやてぇ…」

そう言って佐藤は泣き出した。これを見たみんなはぶちキレた。

「お前飛んでみるか？きついのは縄を回しとるお前だけやないんや！一緒に飛びよるみんなもおま　　えとおんなじようにきついんや！なのに最初っからできない？お前が縄まわさへんかったら誰が　　まわすんや？」

「お前のせいで何もかもが台無しやっ！がっかりやなぁ。そんな弱気な奴がこのクラスにおった　　んか…」

玉治がようやくグラウンドに出てきた頃にはみんなはグラウンドから姿を消していた。

「おかしいなあ…朝練するっちゅう事言うてたんやけどなぁ？」

一方教室では…

「おいっちゃあ！てめえ本気でやる気あんのか？」

ガンッ。

大きな音と共に佐藤の机が倒れた。机の中身はぐちゃぐちゃに床に散らばった。

「キメェんだよ。死ね！」

そう言ったのはカレンとナオだった。佐藤はそれを黙って片付けた。そして黙って泣いていた。

「まあ…無理もないやろうなあ、マキ。」

「そやなぁ。あいつ全然やる気ないしなぁ…」

こうして本番まで一週間となったけれど、みんなは成功させようとも思わなくなった。

●団結

体育祭前日となった朝。この日もいつものようにやる気はないが朝練には来ていた。

「大縄も、成功しないんだろうなあ…佐藤の奴まわす気もないしなぁ…」

すると驚く事に佐藤が縄を持って練習していた。一緒に練習していたのは…

なんとユメだった。

「もっと大きく肩をまわすようにするんやっ！そうやっ！その

調子やっ！」
　みんなは明らかに変わっていた。それはきっと、佐藤が頑張ったからだ。
「よしっ！じゃあみんなと合わせるでぇ？ええか？」
「うんっ！！やってみる。」
『せ～のっ！！』
　元気な掛け声と共に縄が回りだした。
　するとまあ奇跡とまではいかないが１４回程度飛べた。昨日までは３回だったのに。
「すごいやんかぁ！！明日もしかしたら奇跡が起こるかもしれんでぇ？」
「せやなぁ！ガンバロ！」
　このクラスはまとまった。初めてまとまったんだ。みんなと心がひとつになったと言うと綺麗に　聞こえちゃうかもしれないけれど、確かに考えていた事はみんな同じだったんじゃないかな？
「明日絶対成功させるぞ～っ！！！」
『お～うっっ！！！』
　ねっ？成功させたいんだって事。ちゃんと行動で示してやったぞ！
　ユメは知りました。人って自分の行動次第で、気持ち次第でどうにもなっちゃうんだって。
　明日絶対成功させてやるっ！そして玉冶から焼肉おごってもらうぞ！！！

迷子

●はちゃめちゃ体育祭→→

体育祭当日…

「ぜってぇ勝つぞぉ！！！！！！！！！！」

『勝つぞぉ！！！！！』

みんな奇跡を信じて頑張った。結果はビリから2番目だったけど、大縄では29回も飛べたん　　だ。

奇跡じゃん。もしかしたら元々できるやつらだったのかも。こうしてとってもよかった。

ていうか楽しめた。悲劇が起こるまでは…

●友達

2学期の半ばを過ぎようとしていたこの時期、みんなの態度に変化が起きる。

「おはようマキっ！！」

「おはようっ！！」

「ユメからの愛のプレゼント！！」

「えっ？？何々？」

「誕生日おめでと～！！！！！」

「ありがとぉ！！！！」

この日はマキの誕生日だった。

「あっ…そや…今日部活休むわぁ…」

「はいはいっ！！！誕生日やもんなぁ！！！おめでとう！！！！それから大好きやっ！！！！！」

「なんやそれぇ～！！！おかしいなあ。やっぱバカ騒ぎできるのはユメだけやなぁ…」

今思えばもっとたくさんバカ騒ぎしておけばよっかった。

まさかこんな事になるとは思っていなかったから…

●マキ

「おはようっ！！！」
「……。」
元気な声が響き渡ったクラスに沈黙が流れている…
「ちょっ…ユメ見てあれ！！！」
カレンたちが指差したのはスカートをギリギリまで上げて髪を赤く染めて三年の悪い先輩達と一　緒にタバコを吸っている奴がいる。
「なぁ…まさかあれ、マキ…やないよなあ…」
「マキだよッ！！！どう見たってマキだって！」
なんでや？？なんでいきなりそんなんなっとるんや？？わけわからへん…
「マキ、なんかへんやて…」
見たら分かる…でもなんでや？？ユメはマキそんな事せえへん奴とおもっとったのに…
「ユメ、なんかマキにしたんやろか…？」
「ユメがしただけであんなんなるわけないやろ！！！しっかりせぇ！！！」
「うん…」
いきなり怖くなった。まさかシンナー吸っとらへんか…まさかマキがそんな子ことするわけない　やろ…
一瞬、周りのみんなが自分に話しかけているのに気づかず、あたしは固まっていた。
「おい、あいつどうしたんだよ？？なんかおかしくねぇ？？？」
そのままクラスに沈黙が流れた。みんな机に座って下を向いていた。
ガラッ！！！！
ドアが勢いよく開いた。
「おはよぉ～っ！！！！！」
マキだった。みんなは黙って下を向きつづける。
ユメ達もこれには口を出せなかった。あまりに急すぎる変化。

「行こう。ユメ…」
「えっ？どこに行くん？マキも行くわぁ」
カレンとナオはマキをきつく睨みつけて言った。
「誰やあアンタ？？見た事あらへん顔やなぁ。」
「ナオこんな人知らへんよぉ！！なぁ、転校生かぁ？？？」
「行こっ！！」
マキはナオとソラを睨み返した。
「マキッ…」
そう呼んだがカレン達に腕を引っ張られ教室を出て行った。
マキ…マキ…なんでや…？なんで…
ポタッ。
一筋の涙がユメの頬をつたった。
「ユメ…？なんでユメが泣くねん？」
「違うんや…ユメはマキの事が気になんねん…なんか理由があると思うんや…」
「…せやけどな、ユメ。マキは今たぶん悩んでるんやて。今はそっとしておく事が大事やとナ　　オは思うで？？」
「そうやけど…」
なんかが引っかかっていた。なんかが…
放課後……
「ユメ、マキな、部活やめたわぁ。」
「なんでぇ？？やめるとか聞いてないわぁ」
「つうかユメタバコ何ミリ？」
「えっ？ユメは一ミリやけどぉ？？」
「まさかマキも吸うとは思わへんかった。」
「いろいろあんねん。」
でも一体…なんで…？？ユメは前からタバコ吸ったり悪さしてたけど、なんで急にマキが…？
「っっ！！！ゴホッ…ゴホンッ！！！」
「マキッ？？？どしたん？マキッ？誰かっ！！誰か来てくださ

い！！！！マキがっ！」

誰かっ……助けてくださいっ……

一本道

●闇

マキッ…大丈夫か…？マキぃ…死んだら…死んだらあかんでぇ…

「マキッ！！！」

慌てて来たのはマキの母だった。

「あのっ…！マキが、その、急に倒れちゃって…」

ユメは顔を真っ青にして振るえながらマキの事を伝えた。

「ありがとう。もう帰ってええよ。ごめんねユメちゃんのせいじゃないからね。」

何も答えられなかった。黙って帰ることしかできなかった。

「ユメぇ～っ！！」

大きな声で走り寄って来たのは先輩達だった。

「ああ、先輩…」

「マキは大丈夫なんか？」

「うん…でも…今手術中で…」

先輩達は黙ってユメを連れて学校に戻った。

「ユメも吸えよ。」

手に取ったのはタバコだった。

ユメは誘惑に負けてしまいタバコを口にしてしまった。

「ユメッ。来いよ。」

ユメを呼んだのは先輩のメグだった。

「なんすかぁ？？」

「お前、マキになんかあったんやないかって思うとらへんか？」

「…まあ。」

メグは大きくため息をついた。

「メグ、マキから言われて黙っとったんやけど、言うわ。」

メグは何やらためらっていた様子だが、話し出した。

「正式な事は聞いてないんやけど、マキ、病気らしいねん。な

んか治らへん病気らしいぞ？
　あいつ、ユメに言うと一番傷つくけん、言わんといてって言われたんやけど…」
　頭の中が真っ白になった。まさかマキが…昨日まであんなに元気で笑ってたマキが…
　病気…？死ぬ…？
「ウソやぁ～っっ！！！！わぁ～っっっ！！！！！！！！！！！！！」
「ユメッ！！落ち着けぃっ！！！ユメッ！！！」
　その場でユメは泣き崩れた。マキが…マキがそんなはずないやんか！！！！！！！
「嫌やぁ～！！！！！！！！！」
　真っ暗になった。
　ユメからマキを取ったら何が残んねん？？なぁマキ？？嫌やぁ…マキぃ！！！！！！
　嫌や嫌や嫌やっっ。
　行かんといてやっ…マキぃ…
「なぁユメ？今は、現実をしっかり受け止めりいやぁ…」
「……。」
「ユメッ！！！！そんなん落ちこまへんの！！大丈夫や。メグだって今頑張って良くなりよるやんか　　ぁ！」
　メグは今覚せい剤うって精神科からやっと帰ってこれたところだった。
「そうっすね…今日は帰ります…」
　とはいったものの、やっぱり受け止められないユメは、この日から崩れ落ちて行く…
●決意
「コラッ！！！ユメぇ？起きなさいよぉっ！！」
　ガチャッ！！
　ドアを開けるとそこにはユメの姿は無く、一通の手紙が置かれ

ていた。

「何やこれ…？」

【　お母さんへ　】

ごめんお母さん。ユメは弱い人間だったよ。

いつもいつもユメがヤバイ立場になったら逃げてた。

今回もまた逃げる事になるんや…

今までいろいろ助けてくれてありがとう。

ユメは幸せだったよ。

こんなに温かいお母さんのもとに生まれて来れて。

こんなにたくさんの仲間に囲まれて。

幸せだった。

今までピンとこなかったこの幸せが、今ユメのもとにあります。

安心してな。お母さん。ユメ、ちょっと足洗ってくるだけやから。

生きるって、一人で生きるって、どういう事なんか、ちょっと知りたいんや。

一人で生きていく方法、探しに行ってくるわ。

ほなな。いつまでも迷惑かけっぱなしのこのバカ娘に、一度だけ、チャンスをください。

逃げ道を探す事に夢中になるより、自分の道を探すほうが何倍も先や。

もう逃げたりせぇへんから。

自分で金かせいで生きてくわ。

だからお願いや…マキの事、よろしくお願いします。

あいつ、治らへん病気なんや。死ぬんやて…でも今、あいつ必死で生きようとしよる。

だからお願いや…あいつには、負けてほしくないんや。

ユメも頑張るけん、あいつにも生きてもらわなあかん。

お願いやお母さん、ユメのことはもう忘れてや。
マキのことだけ考えてください。
どうか、マキの命だけはとらへんで…
助けてやって…お願いや…

ユメ

手紙はココで終わっていた。
「ユメ…？なんのマネや？？お母さん、マキちゃんの事なんにも聞いとらへんよ？？」
ごめんな。お母さん…ユメ、ほんとは生きていけるかわからへん。
でも…強くなりたいんや。
マキの分まで。たくさんこの空を見ていたいんや。
生きてやりたいんや。
笑っていたいんや。
でも…今のまんまやったら、絶対それはできんと思うんや。
だから、強くなるんや。努力するんや。
人はみんな、いつかは死ぬんや。
だから今を大事に生きるんや。
なんでこんな事考えれるんやろ？
なんでしゃべれるんやろ？
なんでこんなに涙が出るんやろ？
なんで…人は生まれるんやろ？死ぬんやろ？
まったく、この地球ができた事じたい奇跡なのに、この日本ができた事じたい奇跡中の奇跡なの　に、
私達が生まれた事は、もっと奇跡だよ。
呼吸していて、いろんなこと感じて、それって実は、とんでもなく大きな幸せなんだよね？？
そう思って良いんだよね？？

ユメ、必ず強くなってみせるよ？生きてみせるよ？？
なぁマキっ…

出会い

●ユウト

とはいったものの、やはり一人で生きていくのは無理がある…

ここは夜の町…

「何してんやろ…アホやなあユメは…」

酔っぱらいのジジイもいればチャラチャラしている奴もいる。

人の事言えないけど…

「なんか眠たくなって来たなあ…」

……。

「おいっ！いい加減起きろっ！！」

「ほへっ??」

起きると横に見知らぬ男がいた。

「なんやアンタ??チカンか???」

「アホッ！こっちが聞きたいわっ！！お前俺の肩の上で何時間寝とると思うとるんか???」

そういえばずっと横に枕のような物があったような気もする…

「ご、ごめん…」

「あはははっ！！！！お前面白い奴やなぁ～。」

その男はユメと同じぐらいの年に見えた。

「お前、名前は?俺桜井雄途。」

「ユウト?へぇ…ユメは夏川由愛。１３歳や。」

「へぇ。ユメかぁ。ええ名前やんか。俺は１４歳や。中２。」

「ふうん…何しとると?」

「俺?なんだと思う??」

「はぁ?知らんから聞きよるんてぇ！！！！」

それからユウトはにっこり笑った。

「ちょっと来いよ。」

「えっ??ちょっ、待ってっ！！」

なんなんやコイツ？
「教えてやるよ。俺が何してんのか。」
またにっこり笑うユウト。
そうしてユメはユウトに腕をつかまれて連れてこられた場所はとんでもない所だった。
「うい～っす！！！」
「おおっ！！ユウトか。どうした？？今日はもう予定入ってないぞ？？」
「いや、ちょっとこの娘に見せたい物があって。スタジオ入ってもいいっすか？」
「おお？？女か？いいぞ。とことん見て来い。」
っていうかココって…スタジオ？？セット？ユウトって…俳優？
確かにどっかで見た事ある顔だもん…
「ユ…ユウト！もしかしてさぁ…」
「ああ、俺？本名桜井雄途。芸名春野哲。」
「哲って、あのテレビとか映画とかで見るあの哲！？」
「そうだけどぉ？？？なんや。今ごろ気ずいたんかぁ？ショック…」
「ほんまに？？ほんまに哲？？」
「哲やけどぉ…？本名いちおユウトなんでぇ…」
「あっ。ごめんユウト。でも別にユメはユウトの事、普通の中学生として見てもええ？？」
「もちろんや。そのほうが俺も楽やしな。ほな行こか？」
「うん。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3061b/

ヒカリ

2010年10月15日17時31分発行